

11. 上福田と大聖寺川

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小脇, 周子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/5009

11. 上福田と大聖寺川

小 脇 周 子

- I. はじめに
- II. 大聖寺川の歴史
- III. 大聖寺川と人々の生活
- IV. 考察
- V. おわりに

I. はじめに

大聖寺の中心を流れる大聖寺川。全長 38.01km、低湿な江沼平野を流れ、塩屋で日本海に入る。石川県では手取川に次いで二番目に大きな川だ。調査前、私はこの川が幾つかの歴史を歩んできたことを知った。一つは、長年にわたって幾度となく氾濫を起こしてきたこと、そしてもう一つは、河川改修によって新川が作られたことである。水害をほとんど経験したことのない私にとっては、大聖寺の町が毎年のように洪水に見舞われてきたことが驚きであり、その歴史がとても特異なものに感じられた。そもそも水害対策として新しく川を作るという考え自体が私の頭の中にはなかったのだ。これが大聖寺川に興味を持つきっかけとなった。

実際に地域の人々に話を伺っていると、水害の話題に対する人々の反応は私が思っていたより大きかった。また、調査中に何度か川沿いを歩くことがあり、ふと「この川は住民にとってどのような存在なのか」と思うことがあった。そこで興味を抱いたのが、彼らが水害との戦いの中で川と共にどのように暮らしてきたのか、過去または現在の生活において川と関わる機会とはどのようなものか、ということであった。

以下ではまず、大聖寺川の歴史を概観し、その上で、水害に対する人々の対策や意識、人々の生活と川との関わりについて述べる。そして、それらの変化について考察し、最後にこれからの大聖寺川のあり方についても考えていきたい。

II. 大聖寺川の歴史

大聖寺は古くから「水害の町」として知られている。毎年梅雨の時期になると大なり小なり浸水騒ぎがあり、水害は大聖寺の年中行事となっていた。ひどい年には春の雪解け水と梅雨の長雨で、一年に二回も水が溢れたそうだと(70歳代、女性)。夏から秋にかけての台風とそれのもたらす集中豪雨に因るものもあった(『加賀市史』p.352より)。上福田を中心に行った聞き取り調査でも、皆が口をそろえて「昔はよく水がついた」と言って、水害の経験を語ってくれた。幸いにも、1981(昭和56)年以降大きな水害は起こっていない。水害を防ぐため、現在に至るまでにどのような対策が施されてきたのか、それによって上福田がどのような影響を受けたのか、その歴史に触れていきたい。

1. 水害の激化と河川改修

『加賀市史』(pp.352~353)によると、藩政時代、大聖寺川の上流は田畑の灌漑用水源として使われ、下流は舟の便を持ち、洪水時には下流付近に氾濫区域を設けて調節していた。また、新川を掘って河道の屈曲を少なくして排水を円滑にする工事は二代前田利明の時に実施された。犀が淵及び新川の御普請といわれるもので、このあと旧川はなお細く残り、新川と旧川の間には法華坊が残った。それでも氾濫は止まず、土堰を作ったり、石丁場を切るなどした(『吟詠錦城山(大聖寺城)物語』p.359より)。明治維新後になると、下流でも田畑の保護の見地から、堤防を築造して氾濫した水をくい止める手段が講じられてきた。しかし、明治時代にはまだ森林保全の考えが浅く、森林伐採が進んだため、大聖寺川のバランスは崩れ、年を追って水害は甚だしくなった。大正時代になると、半日ほど大雨が降れば、たちまち水が溢れるという状況で、その都度大聖寺町のほぼ三分の一が水浸しになったという(『加賀市史』p.353より)。

そもそも大聖寺がたびたび水害に見舞われる原因は、大聖寺川の流れが遅いことと、くねくねと曲がっていることにあった。そのため、増水すると川下から「のまりみず」「のまえ水」と呼ばれる逆流が始まり、水が流れていかないで溜まり、その結果溢れ出したのだった。これを改善するためには、川筋をまっすぐにすることが必要だった。大聖寺川の改修問題は古くからあったが、なかなか実施できないまま、沿岸の町村では自発的に堤防工事を行ってきた。福田村をはじめとする下流地域のみならず、上流部でも各部落が競争して堤防を築造し、これが大聖寺川の水害激化の一因となっていたのである。

そこで1933(昭和8)年から河川改修工事が開始された。町中を蛇行する大聖寺川(旧川)の川筋を、まっすぐに流れる新川へと変更したのである。大聖寺藤ノ木町の西から下福田にかけて新川が建設され、放水路となった。1937(昭和12)年に本格的工事が始まり、その後も二次工事が行わ

れた。最終的に現在の姿になったのは今から 15 年程前 (1986 [昭和 61] 年) のことだ。最初の工事はトロッコでの作業だった。敷地からまっすぐ田んぼをぶち抜いて堤防を作り、そこに線路が敷かれていたらしい。掘った土はそのトロッコを使って新旗陽町や松島団地に運ばれた。A さん (60 歳代後半、男性) は「小さい頃、トロッコに乗って遊んで怒られた」と話していた。その後も下流部における河川改修 (昭和 41 年 [1966] 年) や川幅拡張工事 (昭和 61 年 [1986] 年) が行われた。川幅拡張工事によって川幅はおよそ二倍の 75 メートルに広げられ、三谷川との合流部をなめらかな川の流れに形成し直した。同時に、以前はなめらかな斜面であった土手もきちんと固められ、堤防が整備された。また、川沿いにはサイクリングロードが新しく作られた。

河川改修の際、上福田は川筋に土地を提供した。大量に農地が買い上げられたのである。これによって上福田の農家は少なくなり、農業の他に職業を求める人が出た。土地の値段は通常の農地の 3~5 倍程度で、宅地なみの値段だったといわれている (70 歳代、男性)。また、1985 (昭和 60) 年頃に川幅を拡張した際にも、上福田の人々は同じく農地を提供した。A さんの家では、それまで 1 町 5 反ほどあった農地が今では 1 町ないくらいだという。また番場町に住む男性の話によると、上福田は町に近く、もともと半農半町だったため、「人々はあまり土地に執着がなかった」そうだ。A さんにも話を聞いてみると、川幅拡張の際にも「上福田の人は農地の値段に関してあまり交渉しなかった。本当はもっと高く売れたかもしれないが、みんなねばらなかった」と語っていた。

2. 水害と治水問題

今回話を聞いた中で、人々の記憶に残っている大きな水害は、1934 (昭和 9) 年、1953 (昭和 28) 年、1958 (昭和 33) 年、1981 (昭和 56) 年の四回が主なものだった。1934 (昭和 9) 年の水害は、手取川の大水害に連動して起こったものだった。この水害の後、1. で述べた河川改修が行われ、川筋が新川に変更された。1953 (昭和 28) 年の水害は、床上浸水したという話以外は具体的な話を聞くことができなかった。1958 (昭和 33) 年の水害は、「飼っていた牛が流れるくらい」の大水害だった (60 歳代、女性)。この大氾濫を機に、治水問題がクローズアップされるようになった。その一つは下流部における河川改修 (1967 [昭和 41] 年) である。もう一つは我谷ダム建設 (1961 [昭和 36] 年) で、1967 (昭和 41) 年 6 月に完成した。このダムができるまでは、ほぼ毎年水害の被害があったそうだが (B さん、30 歳代男性)、我谷ダムが完成してからは特に大きな自然の水害は起こっていないと考えてよい。C さん (70 歳代、女性) の話によると、この後で起こった 1981 (昭和 56) 年の水害は、ダムの放水のタイミングを間違えたことによる人工災害だった。このとき、加賀市役所や大聖寺警察署までも浸水し、水位は腰のあたりまで上がった。私が調査に伺った上福田の家には、この水害で水に浸かった跡が壁や柱にはっきりと残っていた。ちょうど下から 20 cm くらい、階段 2 段目のあたりである。この水害の後、建設省から激甚特別災害の指定を受け、川幅

拡張工事と九谷ダムの建設が始まった。また、逆流を防ぐための逆水門が作られ、旧川と新川は水門で仕切られた。以降、現在に至るまで床上浸水するほどの水害は起こっていない。

水害の際には、大聖寺地区の消防隊が出動して人命救助を行っていた。また、舟で町内を回り、飲料水やおにぎり、缶詰などの食糧を住民に配給していた。一方、上福田の消防団は有志の集まりで、昼間は仕事に出ていて不在だった。そのため、水害で出動することはなかったそうだ（50歳代、女性）。

III. 大聖寺川と人々

1. 水害に対する住民の対策と意識

先にも述べたが、主に四回の水害が住民の記憶の中に特に強く残っているようだった。少なくとも1981（昭和56年）年の水害に関しては、まだ鮮明に覚えている人が多く、「このときは腰まで水が上がって大変だった」と何人もの人が言っていた。また、Cさん（70歳代、女性）は子供の頃の水害体験について、当然のことながら、汚物が流れ出して非常に不衛生だったこと、舟で食糧が配られていたことを話してくれた。こうした長年にわたる水害との戦いから、大聖寺の人々は家や財産を守るため、様々な工夫をしてきた。家の造りとしては、どの家も床をできるだけ高くしていた。古い家はもちろん、水害が起こらなくなってから建てられた家でもそうしている家が多いということだった。実際の上福田の40歳代女性は、水害対策のために1m程高い位置に家を建てている、と話していた。また、大聖寺の家は、どの家も床板に釘を打たず、簡単に取り外せるようになっている。水が溢れてきたらすぐに畳をあげて床板をめくるためである。そのため、各家には畳をあげる「台」が何台も常備されていた。この台は高さ1mくらいの木製の脚立のようなもので、簡単に組み立てることができる。今でも家のどこかに保管されているだろうとBさんは言っていた。Cさんの家では、その台の代わりに絹糸を入れる木の箱の上に畳やタンスを乗せていたそうだ。また、畳をあげるために家の中にできるだけ棚を多く作ったことも、水害から身を守るために生まれた、生活の知恵であったとCさんは話していた。

大聖寺の人々は水害に対する準備が日頃からあり、水害の際にもあまりあわてなかった。それは先に述べたような物質的な準備はもちろん、意識的な部分でも日頃から準備があったといえる。大水と聞けばすぐに畳をあげて床板をめくる訓練が子供の時から各家でなされていたし、水害の教育は小学校でも行われていた（Cさん）。Aさんの話によると、上福田も昔から土地が低い所ですぐに水に浸かっていたため、昔から住んでいる人は対応慣れしている。川が流れている間は溢れる心配はないが、流れが止まったら危険だということは誰もが知っていた。そのため、「川の流れが止まっ

たら畳をあげろ」ということがよく言われていたそうだ。今でも、「危ない」と思ったらすぐに車を山に移動させるなどの対応をする。新しく上福田に入ってきた人は慣れていないが、知識さえあれば水がついても大丈夫、と話していた。またCさんによると、水害が起こらなくなった現在でも、70歳以上の高齢者を中心に水害に対して注意深いそうだ。そこで、ちょうど補充調査を行っていた2004（平成16）年の秋には台風が日本に何度も上陸し、その影響で大聖寺地区もかなりの大雨を受けたことがあったので、そのときの対応について聞いてみたところ、「川の様子を見に行っただ」という意見もあったが、「最近はまだ水がつく心配がないから、わざわざ川までは見に行かなかった」という意見が多く聞かれ、水害に対する注意力が薄れてきていることも感じた。また、「山中のクロヤ橋の下にあるネコ岩に水がかぶったら大聖寺川に水がつく」という言われがあり、私が聞き取りを行った中では全員が知っていた。Cさんによると、これは単なる言われではなく本当のことで、ネコ岩は手を広げたくらいの幅がある大きなものだという。

2. かつての大聖寺川と生活

かつての大聖寺川は、人々の生活と密接に関わっていた。そこでまず挙げられるのが、巡航船の存在である。旧川にはかつてポンポン船と呼ばれる巡航船が行き来していた。貨物船、客船としての利用があり、誰でも乗れた。『加賀市史』の記述からその歴史を見ていく。動力船が就航する以前は、大聖寺と吉崎間を小舟が運行し、人なら20人前後を乗せて運んでいた。主要な貨物は木炭であった。その後、1925（大正14）年に動力船がはじめて登場し、巡航船時代となった。大聖寺町新橋から吉崎経由で塩屋村まで、その間各部落の船着場に寄港した。今でも、旧大聖寺川に架かる新橋付近にその船着場の名残がある（80歳、男性）。一組の巡航船で100人前後を乗せ、一日六往復、七隻が運行していた。吉崎は吉崎御坊の所在地であるため、吉崎参りの男女が利用し、縁日には大変な混雑であった。客船は個人の船で、当時は洒落た乗り物だったそうだ。（80歳、男性）貨物の輸送も行われ、大聖寺からは米、砂糖、しょうゆ、清酒、材木、石材、塩を積み、塩屋からは魚を積んでいた。大聖寺の人々が新鮮な魚を食べたり、塩屋の人々が生活に必要な食材を手に入れるために、巡航船は大きな役割を果たしていたといえる。しかし、1947（昭和22）年に定員オーバーのため船が沈没し、19名もの人が犠牲になったことがきっかけで巡航船は廃れていった。

また、川の水は洗濯や食料を洗うなどの生活用水として使われていた。現在80代の女性は「結婚した頃（1945〔昭和20〕年頃）は大聖寺川で米をといだり野菜を洗ったりした。おむつも洗った」と話し、「こして飲んだ」とも言っていた。大聖寺川の水は砂利などが混じっていて「かなけ」があるので、こして飲料水として使っていたそうだ（80歳代、女性）。また、泳いだり魚を獲ったりと子供の遊び場にもなっていた、とAさんは言っていた。

3. 現在の大聖寺川と生活

今では生活の中で川と関わることはほとんどなくなった。現在、川と関わる数少ない機会のうちの一つは河川美化運動、もう一つは灯籠流しである。

河川美化運動は、大聖寺地区まちづくり推進協議会と大聖寺区長会の主催で、全町民で大聖寺の川、公園、町内をきれいにしようという「大聖寺地区クリーン大作戦」の一環として行われる。その趣旨は「幼い子どもたちにめだかや鮎の住む美しい川を、またお年寄りの方には自然を楽しみながら散歩できる公園や名所旧跡等の自然保護、生活環境の整備をはかる」というものである。1973（昭和48）年に開始して以来、大聖寺川を守ってきた功績で1991（平成3）年に環境庁長官表彰を受賞した（広報「大聖寺」より）。年一回、毎年6月の第一日曜日に行われ、主に河川敷の雑草狩りやゴミ拾いをする。使用する軍手（世帯数分）やゴミ袋（各町10枚）、わら縄、混合油はまちづくり協議会の方から支給される。上福田の担当は新川の宮前橋から畑橋までだが、その向かい岸の区域は担当がないので、上福田の男性が個人的にやっているそうだ。2004（平成16）年度の大聖寺全体の参加率は82.5%、参加平均年齢は54.9歳、作業完成度は94.5%だった（広報「河川美化活動アンケート」より）。不参加の場合、上福田では一戸あたり三千円の罰金がとられる。また、この活動の後、懇親会が開かれる。上福田のDさん（64歳、女性）に話を聞いたところ、「部落として毎年参加している。昔は地道な作業だったけど、今は楽ちん。懇親会も必ず参加している」と言っていた。また、大聖寺地区で河川美化標語が募られており、「思い出そう むかしの河川を」や「美しい川は わが町の誇り」「ふるさと大聖寺川 美化で心もクリーン」などといった標語が寄せられている（広報「河川美化活動アンケート」より）。

灯籠流しは8月に旧川で行われ、1997（平成9）年に始まった。比較的新しい行事である。戦争で亡くなった人が天国に行けるように、霊を慰めるためである。灯籠の中にろうそくを灯して、法華坊から200m程流す。全部流すのに30分かかる。実際に見に行くことはできなかったが、2004（平成16）年度はおよそ950個流したそうだ。この灯籠流しを手伝う人は百人以上、見に来る人は二千人に上る（錦城小学校四年生「大聖寺川探検隊」より）。

また、1986（昭和61）年の川幅拡張工事の際に作られた新川沿いのサイクリングロードを利用する人も少なくない。私も調査中に何度か散歩したが、意外と人とすれ違うことが多かった。片側には田んぼが広がり、もう一方には住宅地が見渡せた。Dさんによると、サイクリングロードは犬の散歩コースになっており、スーパーへ買い物に行く際にもよく利用するということがあった。町内を歩いていて感じたことで、実際の数値は分からないが、上福田では犬が飼っている家が多い。当然、犬を連れて川沿いのサイクリングロードを利用する人も多いのではないかと考えられる。

その他、錦城小学校では学習の一環として、子供たちが川と触れ合う機会が設けられている。2004（平成16）年度には、四年生が「大聖寺川探検隊」と称した研究を行い、川のゴミ調べや灯籠流し

について発表していた。実際の発表は聞いていないが、発表に使った資料を見せてもらったところ、川に空き缶やビニール袋が捨てられていたことや川でウグイやフナ、ハゼ、50cmほどのコイが釣れたという報告があった。また、水害に関する研究発表を行ったクラスもあると聞いた（錦城小学校校内授業研究会の展示より）。

IV. 考察

はじめにも述べたように、私はほとんど水害を経験したことがない。小学生の頃に二度洪水を経験したことがあるが、ほんの数時間で水が引くような小規模なものだった。それでも、その時の記憶は私の中で鮮明に残っている。茶色く濁った川の水が溢れ出し、魚やゴミが流れ、独特の異臭が漂っていたのが印象的だった。この光景が、大聖寺では毎年のことだったのだ。人々の意識の中で水害の経験が相当強く残っているのは言うまでもないことだろう。実際に聞き取り調査を行っていると、やはり高齢者の方を中心に当時の経験を多く語ってくれた。一方で、最近では大雨が降っても以前のように敏感に反応することはなくなったようだった。上福田をはじめ、地域の人々が土地を提供するなどして水害の防止対策に協力してきた結果、昭和56年の大水害以降、その恐怖にさらされることはなくなったからである。以来、水害の経験者の数は減少し、同時に人々の水害に対する注意も薄れてきたといえる。残念ながら、10代、20代の若い世代に話を聞く機会を作ることができなかったのだが、実際に水害を経験したことのない世代にとっては、水害は自分達の生活からかけ離れたところにある存在だろう。はるか昔から毎年水害に悩まされ、また向き合ってきた長い年月に対し、ここ20年のうちに人々の間に「もう水がつく心配がない」という安心感がもたらされたことは、大きな変化であるといえるだろう。

また、人々の生活と川との関わり方は、巡航船の利用や、洗濯などで川の水を使ったり、川で遊ぶといった生活に密着したものから、河川美化運動や灯籠流しなどの行事的なものへと変化した。その背景にはまず、生活環境の変化が関係していると思われる。戦後、道路交通機関は発達し、廃れていった巡航船を復活させる必要はなかつただろうし、水道の整備が進み、わざわざ川まで水を求めて行く必要もなくなつただろう。また、堤防が整備されたことによって川との距離は遠くなり、実際に川に触れることは難しくなつた。大聖寺川に限らず、「昔は川で遊んだ」というのはよく聞かれることだ。少なくとも私の両親が子供の頃まではそうだったと聞いた。しかし近年では、子供の普段の遊びで川遊びをする姿はほとんど見かけない。川との直接的な距離が遠くなつたことに加えて、ヘドロが積もるなどして水が汚れてしまったためだろう。そのため、現在では主に河川美化運動という活動を通して川と関わっている。参加率は80%を超えており、Dさんが言っていたように

大聖寺地区の人々は皆、部落として活動に参加しているようだ。上福田では終了後に懇親会が開かれるなど、住民にとってはこの河川美化運動が川と触れ合う場であると同時に、地区の人々と交流を深める場となっており、大きな行事の一つであると言っていいだろう。

また、大聖寺川は大聖寺地区の大きな境目となっており、地区内は川のこちら側、向こう側というように区別されるそうだ（60歳代、女性）。川は自然と住民のシンボリックな存在になっているのだろう。このようにして、水害をはじめ、大聖寺の人々は様々に大聖寺川と関わってきた。時代とともに関わり方の形は変わっても、この川が人々にとって身近な存在であることは変わらないのだろうと今回の調査で私は感じた。

V. おわりに

補充調査中、小学校の学習の中でも水害について、大聖寺川について知る機会があることを知った。これから先どんどん水害の経験者が減り、大聖寺が「水害の町」であったことすら忘れ去られてしまうかもしれない。そんな状況の中で、学習として水害の歴史や経験を語り継いでいくことや、身近にあってつい見逃してしまいそうな川の存在を改めて知ることの重要性を感じた。また、住民の手によって大聖寺川が美しく維持されることで、住民自身の心も癒され、大聖寺川は町のシンボルとして在り続けることだろう。